

聖書日課 『からし種』 2022.12.18-12.25

<p>12月 18日 (日) 民数記 30章</p>	<p>「誓願や苦行による物断ちの誓いはすべて、彼女の夫がそれを有効にも、無効にもすることができる」(14節)。妻は夫の「所有物」と考えられていた時代の戒めの言葉。それに対して主イエスは、女性一人ひとりが神の前に主体をもった礼拝者であり、その祈り、願い、涙を大切に受けとめ、彼女たちとの対話を喜ばれた。その主と共に礼拝できることを喜びたい。</p>
<p>19日 (月) 民数記 31章</p>	<p>「主はモーセに仰せになった。『イスラエルの人々がミディアン人から受けた仕打ちに報復しなさい』」(1-2節)。カナンにイスラエルの人々が入植していく場面は胸が痛くなる。イスラエルには「約束の土地への入植」であっても、カナンの人々には「侵略」である。当然ながら衝突が起こる。人間の罪の歴史を十字架で引き受け、平和の道を開かれた主を覚えたい。</p>
<p>20日 (火) 民数記 32章</p>	<p>「ガドとルベンの人々は答えて言った。『主が僕どもに語られたとおりにします』」(31節)。土地の割り当てに際し、ガドとルベン族は「他の十部族が土地を得るまで共に戦う」という条件で特別にヨルダン川東岸の土地を得た。「自分が住む場所」を確保すれば終わりではなく、「兄弟姉妹の住む場所」を確保する責任がガドとルベンの人々に託されたのである。</p>
<p>21日 (水) 民数記 33章</p>	<p>「わたしは、あなたたちがそれを得るように土地を与えた。氏族ごとに、くじを引いて、その土地を嗣業として受け継がせなさい」(53-54節)。「嗣業(しぎょう)」とは、神から恵みとして与えられる財産のこと。イスラエルの民は、嗣業として受けた恵みを代々大切に受け継ぎ、手渡していく責任を負った。今日、神が私たちに受け継ぐように託された嗣業は何だろうか。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.12.18-12.25

<p>22日 (木)</p> <p>民数記 34章</p>	<p>「モーセはイスラエルの人々に命じた。『これは、あなたたちがくじを引いて、嗣業として受け継ぐべき土地である』(13節)。「嗣業」は「くじ」で割り当てられた。「私の努力で得た土地」でも「私の好みで選んだ土地」でもなく、「神の思し召し」としてイスラエルの民は「嗣業」を受け取ったのである。神が祈りを込めてわたしに託してくださった「嗣業」とは何だろうか。</p>
<p>23日 (金)</p> <p>民数記 35章</p>	<p>「これらの六つの町は、イスラエルの人々とそのもとにいる寄留者と滞在者のための逃れの町であって、過って人を殺した者はだれでもそこに逃れることができる」(15節)。「過って罪を犯した者」がもう一度やり直すことのできる町。自分の罪を見つめ、正式な裁判を受ける時間を与えられる町。主イエスはいわば私たちの「逃れの町」となってくださったことを想う。</p>
<p>24日 (土)</p> <p>民数記 36章</p>	<p>「ツェロフハド家の娘たちは、主がモーセに命じられたとおりにした」(10節)。民数記27章の続き。女性は人口調査の対象として数えられなかった時代に、ツェロフハドの娘たちは「自分たちに用意された嗣業を受け継がせてほしい」と声を上げたところ、他部族の女性たちの権利としても認められたのだった。最初に勇気をもって声を上げる大切さを示される。</p>
<p>25日 (日)</p> <p>申命記 1章</p>	<p>「モーセは、ヨルダン川の東側にあるモアブ地方で、この律法の説き明かしに当たった」(5節)。ヨルダン川の手前で人生を終えるモーセが、川を越えて進む新しい世代の全員に向けてこれから行う遺言説教。百二十歳近いモーセの声は、広大な草原の上を吹く風に乗って、全員で百万を超えようという人々にどのように響くのだろうか。</p>